「東広島市と原爆」

～救護・救援（きゅうご・きゅうえん）活動を中心として～

１　傷痍軍人広島療養所（しょういぐんじんひろしまりょうようしょ）

（１）「きのこ雲」の写真

右の写真は、原爆が投下された広島市から約 25 キロメートル離れた西条町寺家の傷痍軍人広島療養所〔現 東広島医療（いりょう）センター〕に勤めていた鴉田（からすだ）さんが、病院そばの大沢田（おおぞうた）池から撮った原爆「きのこ雲」の写真です。

８月６日、療養所の救護班（きゅうごはん）は午前 10 時過ぎに出発して広島市へ向かい、青崎国民学校や東警察署付近で救護に当たりました。以降、出動は９月 10 日頃まで続いたそうです。また、療養所にも多くの被災者（ひさいしゃ）が運ばれ、手当てを受けました。

撮影　鴉田藤太郎　提供　広島原爆被災撮影者の会

市内へ向かう救護班　提供　広島原爆障害対策協議会

（２）元救護班員の手記

朝日新聞社「広島・長崎の記憶　被爆者からのメッセージ」（web 版）から転載

坂巻　明子さん（入市被爆 当時 15 歳）東京都日野市在住

原爆投下３日目、傷痍軍人広島療養所［現 東広島医療センター］から、救護班の１人として入り早 64 年が過ぎさっても、何かにつけて思い出すことは懐（なつ）かしくも恋しくも忘れがたい広島です。広島がない、町がない、家もない、何もない、瓦礫（がれき）の中に残ったコンクリートの上の真っ黒い塊（かたまり）で、性別も年齢も、大人か子供かも分からないその人の胸が動いたのでした。生涯忘れることなく頭にこびりついて離れません。ずっと後でそれは死後変化ではなかったかと話してくれた人がいましたが、手の施（ほどこ）しようもありませんでした。

10 歳くらいの女の子の顎（あご）に刺さった分厚いガラスはたくさんで、しかも、がっちりと食い込んで取れないし、火傷（やけど）の人はもうどろどろに化膿（かのう）していてもマーキュロをぬりその上にチンク油をぬるだけ、そんな患者さんがいっぱいで無我

夢中（むがむちゅう）でした。

広島にはとても優しい叔父（おじ）と、叔母（おば）がおりました。上流川町 14 番地でした。燃えさかる火の中で、叔父は倒れた家の梁（はり）に挟（はさ）まれて動けず、叔母は１人では逃げられないと火のなかに飛び込んで２人とも亡くなったそうです。さらに小さい従妹（いとこ）達も犠牲（ぎせい）になりました。

やっとの事で逃げおおせた祖母（そぼ）からこの話をずっと後で聞きました。

３日目ですし、焼け野原で探すことも出来なくて何にもなくなった広島を呆然（あぜん）と眺（なが）めるだけでした。

原爆のような恐ろしい兵器はありません。60 年以上過ぎてもまだ命を脅（おびやか）されています。憎（にく）んでも憎んでも余りあります。

世界中に平和が訪れますように、戦争のない地球でありますように心から祈ります。

〔2010 年修正〕

（３）原爆詩人 峠 三吉（とうげ　さんきち）

詩人の峠三吉は 1917（大正６）年２月 19 日の生まれで、本名は三吉（みつよし）。幼い頃から気管支（きかんし）の病気に苦しめられ、しばしば喀血（かっけつ）しました。広島商業学校〔現 広島県立広島商業高校〕在学時から詩作にいそしみ、卒業後は長期の療養生活を余儀（よぎ）なくされました。1945（昭和 20）年８月６日、爆心地より３㎞の広島市翠（みどり）町〔現 南区翠〕で被爆。1951（昭和 26）年には「にんげんをかえせ」で始まる「原爆詩集」を出版。原爆被害（ひがい）を告発（こくはつ）して、その体験を広めました。36 歳の時、気管支の治療（ちりょう）のため国立広島療養所〔旧 傷痍軍人広島療養所、現 東広島医療センター〕に入院。しかし、肺葉切除（はいようせつじょ）の手術中に病状が悪化し、14 時間の苦闘（くとう）のすえ、被爆から８年後の 1953（昭和 28）年３月 10 日、手術台の上で亡くなりました。

【原爆詩集　序（にんげんをかえせ）】

ちちをかえせ　ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ　わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの　にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ

広島平和記念公園内の詩碑

２　広島地区第 14 特設警備隊（とくせつけいびたい）

（１）賀北部隊（かほくぶたい）

戦況（せんきょう）の悪化により日本本土での戦いが想定される中、地元地域の防衛を目的として作られたのが特設警備隊です。県内には 28 の部隊が作られました。広島地区第 14 特設警備隊は旧賀茂郡北部の男性で組織され、「賀北部隊」と呼ばれました。その中には、西条農学校〔現 西条農業高校〕の生徒もいました。原爆投下の夕方に緊急（きんきゅう）に集められ、翌７日早朝に西条駅から汽車で出発。広島市の中心部において、原爆投下後の惨（むご）い環境の中、救援活動や遺体（いたい）の処理作業などに当たりました。

（２）元隊員の手記

「原爆被爆救援・賀北部隊 手記 被爆五十年隊員の想い」（1995 年発行）から

光本　充晴さん（当時　西条農学校３年生 17 歳）西条下見在住

原爆が投下されて 50 年。当時 17 歳で西農３年生だった私は，８月６日午後３時頃，先生からの伝達で賀北部隊に召集（しょうしゅう）されたことを知り，農業実習をやめてその足で部隊のあった西農北寮（ほくりょう）に入隊し，工月（くずき）中隊第一小隊に配属され，翌早朝５時に列車で西条駅を出発して広島の救援に向かった。その時に接した被爆の惨状（さんじょう）は，この 50 年間脳裏（のうり）を離れる事もなく今でも鮮明（せんめい）に思い出される。

見渡す限りの焼け野原，ズルッと剥（は）げて垂（た）れ下がった皮膚（ひふ），水を求めながらやがて死んでいった全身火傷の負傷者，川面に浮かんだ無数の死体，迫り来る火を逃れたのであろう火傷の身を水槽（すいそう）に入って死んだ数知れない死者，川土手に日覆（ひおい）をした仮設病院に続々担（かつ）ぎ込まれる重傷者その端（はし）から次々に息絶える人，死体を集めて次から次とまとめて焼いた幼年学校の校庭，炎天酷暑（えんてんこくしょ）のもとあの時の広島はさながら地獄（じごく）の様相（ようそう）であった。それでいて，ざわめきの中にも何とも云えない不気味な静寂（せいじゃく）。【中略】

連日，負傷者の収容や死体の処理をし，８月 13 日に帰西して除隊（じょたい）となり，翌春に卒業。やがて就職して今ではその職も退き今日に至っているが，当時，原爆の放射能を浴びた者は，ムラサキの斑点（はんてん）が出る，毛がぬける，体がだるい，こんな事になったらもうおしまいで，やがて死が来ると云（い）われており，酒を飲む人は原爆症は出ないなどの笑い話もあった。私も原爆症は出ないだろうかと常にその陰におびえ，頭の片隅に心配があった。【後略】

（３）賀北部隊原爆被災者救援之碑

右の記念碑（きねんひ）は 1987（昭和 62）年、賀北部隊召集の地である西条中央公園〔元 西条農学校跡地〕内に建立（こんりゅう）されました。翌年「賀北部隊友の会」が結成され、毎年８月７日には式典が行われていましたが、近年は関係者の高齢化によって行われていません。

３　賀茂高等女学校〔現 賀茂高等学校〕

（１）学徒動員（がくとどういん）と救護応援隊

原爆投下、そして敗戦により，学徒動員は終了しました。広島陸軍被服支廠（ひふくししょう）の賀茂高等女学校学校工場は閉鎖（へいさ）され、工場に動員された３年生は、自宅待機（たいき）となりました。また、第 11 海軍航空廠（かいぐんこうくうしょう）〔現呉市広〕に動員された４年生は、寄宿舎（きしゅくしゃ）から帰宅した喜びもつかの間，８月 15 日に県知事から被爆者救護の要請（ようせい）が入り，「賀茂高等女学校救護応援隊（きゅうごおうえんたい)」の編成（へんせい）そして派遣（はけん）となりました。

11 名の先生とともに召集に応じた４年生と３年生の生徒が広島市に入ったのは 17 日。その後，市内四カ所の救護所へ分かれて移動し，懸命（けんめい）に救護活動を行いました。活動は数度の交代を経て，約１か月近く続きました。活動した四カ所は本川国民学校〔現 本川小学校〕・大河国民学校〔現 大河国民学校〕・第一国民学校〔元 段原中学校〕・広島逓信（ていしん）病院〔現 はくしま病院〕です。

賀茂高等女学校３年生（当時 14 歳）に在学し、後に芥川賞作家となる大庭みな子〔本名 椎名美奈子（しいなみなこ)〕は、爆心地から最も近い学校の本川国民学校で救護活動に当たりました。その体験についてエッセイや小説・詩に表現しています。

賀茂高創立 80 周年記念講演パンフから

（２）大庭みな子 エッセイ「地獄（じごく）の配膳（はいぜん)」〔一部抜粋（ばっすい)〕

わたしたちが唇（くちびる）の中に水を注いでやった老婆（ろうば）は糞尿（ふんにょう）にまみれたござの下から財布（さいふ）をひきずり出して私によこそうとした。私が首を振って立ち去ろうとすると，「あ，あんた，どうか，蠅（はえ）を，蠅を追っておくれんさい」と赤むけの顔をひきつらせて喘（あえ）いだ。

瞼（まぶた）のふちにも鼻の穴にも唇にも蠅を這（は）わせた老婆がわずかに身をもがくと，蠅はのろのろと彼女の皮膚（ひふ）から飛びあがり，再びゆっくりとそのぬめった皮膚の上に舞いおりた。

「どうか，どうか，このござをひきずって，あの雨の降る中に出しておくれんさい。雨にあたれば少しは，少しは …… 金はみんなあげる。財布ごと」

まわりの患者（かんじゃ）たちは無表情に老婆を眺（なが）め，蠅の中で寝返りを打った。一時間後，この老婆は死んでいった。わたしにできることはただ雑炊（ぞうすい）を炊（た）くことと，配ることだけであった。わたしたちが米をとぐのは水道の管が切れて流れっぱなしになっている瓦礫（がれき）の間だったが，まわりには一面白骨が散らばっていた。指の骨，足の骨，肋骨（ろっこつ）などがあった。骨の間に水が流れ，こぼれた米粒（こめつぶ）や馬鈴薯（ばれいしょ）の皮が流れた。

十四歳の夏，わたしはものを言わなくなった。そしてこの夏の記憶（きおく）はわたしの生涯（しょうがい）を大きく変えた。歩き始めると，甦（よみがえ）るこの記憶はわたしを立ち止まらせ，人間というものを考え直させる人骨の杭（くい）となった。

４　海軍賀茂病院併設（へいせつ）賀茂海軍衛生学校

黒瀬の乃美尾村にあった海軍賀茂病院〔現 賀茂精神医療センター〕はアジア・太平洋戦争後期の昭和 19 年５月に建設された海軍病院で、大庭みな子の父も軍医として勤めていました。その後、医療関係者の不足に対応するため、太平洋戦争末期の昭和 20 年４月に賀茂海軍衛生学校が作られます。

原爆が投下された翌日夕方、広島市への出動命令を受けた衛生学校の生徒たち約 70 名（歯科医見習生や特別練習生）は、必要な衛生資材（えいせいしざい）をトラック２台に積み込み、８日早朝に衛生学校を出発。昼近くには横川駅付近に到着して救護活動を行いました。

横川三丁目の「広島市信用組合本部前での救護活動
撮影　岸田貢宜　　提供　岸田哲平

救護活動とともに終戦を迎えたため、衛生学校の生徒たちが卒業生として戦地に送り出されることはありませんでした。

終戦後、海軍賀茂病院は国立療養所賀茂病院を経て、現在、国立病院機構賀茂精神医療センターとなっています。近くの黒瀬高等学校正門横には、賀茂海軍衛生学校跡地の記念碑が設置されています。

５　各町村の警防団（けいぼうだん）などによる救援活動

旧賀茂郡内の警防団（空襲（くうしゅう）や災害から一般市民を守るための警察や消防を補助する団体）からも、多くの町村民が被災した広島市内に入り、救援物資の運送やがれきの片づけ作業等に当たりました。

６　広島日赤病院〔現 広島赤十字原爆病院〕院長 重藤 文夫 氏

1903（明治 36）年に西条町下見で誕生。通勤（つうきん）途中の広島駅で被爆後、駅の北側へ避難（ひなん）し、西条からの救援のトラックにひろわれて帰宅。翌日から全焼した鉄筋（てっきん）３階建の病院で懸命（けんめい）に医療活動を続けました。戦後の 1948（昭和 23）年に広島日赤病院の院長となり、被爆者の白血病発現率（はつげんりつ）の高さを突き止めるなど「原爆医療」の道を切り開かれました。さらに 1956（昭和 31）年開院の広島原爆病院の院長も務め、1957 年（昭和 32）年の原爆医療法や 1968（昭和 43）年の原爆特別措置（そち）法の成立に向け、被爆者の側に立って意見を述べられました。1982（昭和 57）年に 79 歳で逝去（せいきょ）。

東広島市ホームページ（名誉市民）から

賀茂高校生の「Peace Bearers（平和の担い手)」としての主な活動

・「東広島市平和学習バス」の高校生スタッフとして事前学習及び当日の運営
・「東広島市原爆死没者慰霊式」の参列及びピースコンサートでの原爆関連手記等の朗読
・「学園祭」での「東広島市巡回原爆展」共催及び演劇部によるエッセイや詩の朗読
・「東広島市生涯学習フェスティバル」（～未来へつなぐ平和のバトン～）の運営

つながろう！ そして、次へつなごう！　戦争や被爆の事実

資料編集　広島県立賀茂高等学校同窓会